

## 実践報告

# 看図アプローチと看図作文の可能性 —「発見」と「疑似体験」の授業—

田中伸子<sup>1)</sup>

TANAKA Nobuko

キーワード：看図アプローチ・看図作文・オンライン授業・アクティブラーニング

### 概要

中国では原因不明の肺炎が大流行し、多数の死者が出て大変なことになっているらしい。2020年の年明けとともに報道され始めた新興感染症のニュース。その時はまだ、わずか数か月後に、授業の日常にまで影響を及ぼすことになるとは想像もできずにいた。あれから2年。「看図アプローチ」という協同学習ツールは、コロナ禍による「学習環境・条件」の未曾有の制約と変化の中、「学習者の実態」に応じて「ねがい」「目標」を到達させるために、どのように「教材研究」され「教授方略」として用いられたのだろうか。さらに「看図作文」は看護教育の中でどのような可能性を持つツールなのだろうか。筆者が担当する2つの科目のこれまで4年間の授業実践をふりかえり、看図アプローチと看図作文、この2つの協同学習ツールの可能性と課題について考察した。

### はじめに

時間と空間を仲間と共有するのが授業環境の前提条件という常識から脱して、感染予防の為に空間を共有することなく、協同学習の看図アプローチで授業をする。とはいうものの、2020年4月COVID-19感染症第一波、会議アプリを使ったオンライン授業（以下、オンライン授業という）を始めたばかりの頃は、看図アプローチの個人思考の後の集団思考はできないまま、マイク機能を使ってクラス内共有をする方法しか見つからなかった。そのため小集団による集団思考を軸とする協同学習の十分な効果が望めず、オンライン授業での看図アプローチの実践は困難であり、協同学習をあきらめて説明型授業を行うという苦渋の選択が行われていた。しかし、しばらくしてチャット機能を活用することで個人思考の共有が効果的に行われるようになると、看図アプローチによる

授業実践が回復していった。2020年夏頃からは、ブレイクアウトルームの積極的な活用によって小集団による対話が可能となり、対面授業に勝るとも劣らない実践が可能となった。2021年度になると、Microsoft Teamsを活用し、看図アプローチの新しい試みによる授業や教科外活動の実践もできるようになっていった。本稿では、看図アプローチを使った授業と看図作文の授業実践を紹介する。この実践を基に、看図アプローチと看図作文、この2つの「看図」の可能性と課題を明らかにする。尚、本稿で使用せざるを得ない、わかりにくい医療専門用語には〈 〉で解釈をつけた。

### 1. 同じ写真コンテンツを使用した1年生と3年生の実践

同じ写真コンテンツを使用して、看図アプローチに慣れていない学習者には看図アプローチを、

1) 長崎県中央看護学校専門課程

看図アプローチに慣れている学習者には看図作文をツールとして活用し、授業を実践した。それらの授業が「どのような学習者」に「どのようなねがい・目標」を到達させるための「どのような教授方略」であったのか紹介する。

**1-1 仲間と共に、新しい価値を発見する—看図アプローチに慣れていない学習者の体験—対象等**

対 象：看護師 2 年課程（昼間定時制） 1 年生
科目と単元：科目「看護学概論」 単元「広がる看護の活動領域」
実践時期：2018 年度から実施（6～7 月実施） 2020 年度—オンライン 2021 年度—対面

**1-1-1 科目の概要**

本科目は、看護学を履修する学習者が最初に学習する専門分野の科目である。看護とは何か、看護師とはどのような職業であるのかを学ぶ。看護の対象・目的・方法を理解する科目である。看護学の奥深さを感じ、関心を高め、専門分野の他の看護学へ導入する役割を持つ。看護に関する過去を知り、現在を理解し、未来を見据えることで、看護の本質が理解できる内容を準備する。

学習者は、准看護師の教育課程を修了し、看護師課程へ入学して間もない学習者である。本科目は入学当初から開講することを基本としているので、クラスの中での人間関係は希薄で緊張しやすい状況の中での授業となる。協同学習の際には、学習者たちの緊張を和らげながら学習効果をあげていく必要がある。学習者は、准看護師としての勤務経験がある者、他の職業からの転職者、子育てや介護を中心とした生活との両立を必要とする者など、年齢・性別などに限らず生活背景が様々であるという特徴がある。

**1-1-2 単元目標**

単元の目標は、社会の変化に応じて拡大している看護の活動領域について理解することである。准看護師免許を持って看護師になるための教育課程へ入学した学習者は、病院や診療所など医療の

現場で活動する看護師像は明確にイメージできる。しかし在宅療養者の自宅へ訪問し看護を行う訪問看護師や災害時に活躍する看護師の姿を想像することは難しい。それは、准看護師課程では災害看護や在宅看護に関するカリキュラムが準備されていないからである。本授業は、動画から切り取った 1 枚の静止画を、看図アプローチを用いて読み解くことにより看護活動領域の広がりについて考えることと、災害看護や訪問看護の実際を知ることにより新学習内容への興味関心を持つことができることを目標に実施する。看図アプローチによる写真の読解後には、東日本大震災の救護に関する動画を視聴する。

**1-1-3 授業の実際**

看図アプローチにはまだ慣れていない学習者なので、授業に興味関心を持たせるため、「これから 1 枚の写真を使って、謎解きをします。謎解きはグループで、協同学習の看図アプローチという手法で行います。」と導入した。4～5 名のグループを作成、写真付きのワークシートを配付し発問した。（写真 1 及び発問 1～4 参照）



写真 1 ※写真は全て © 田中伸子

- |   |
|---|
| <p><b>発問 1</b><br/>写真に写っているものを 10 個以上書き出してください。</p> |
| <p><b>発問 2</b><br/>この救急車はどこにいくのでしょうか。</p>           |
| <p><b>発問 3</b><br/>この中に看護師が 4 人います。どの人が看護師ですか。</p>  |

発問ごとに、5分間の個人思考をさせ、グループでラウンドロビンを使って約10分間集団思考させる。その後、複数のグループの代表者に発表してもらい、内容を共有する。

発問1の変換のステップでは、「救急車」「救急隊」「家族」「車」「駐車場」「木」「足」「担架」「かばん」「携帯電話」などの回答がある。発問2は、要素関連付けの発問である。この発問では「病院に行く」という回答が多くみられる。以前は「どのようなことが起きているか」を考えさせるために、「この人たちは何をしているのか」と質問していた。しかし今では「救急車はどこに行くのか」と問えば、登場人物が何をしていた、どのようなことが起き、救急車は何の目的でどこに行くのかを考えざるをえなくなることがわかったので、発問2を使っている。ビジュアルコンテンツに添える発問はあまり直接的な問いよりも「そこを聞いてきたか！」という意外性のある問いの方が、読みが深くなって効果的だ。

発問2への回答は、救急車で傷病者を搬送しようとしていると読み取り、この救急車は病院に行くという読みが多い。しかし「病院と書かれた救急車に救急隊員が乗るのか？」という疑問を持つ学習者がいるグループや「傷病者を搬送する様子にしては緊張感がないように思う」という感想が出てくるグループは、その意見や感想をきっかけに「この写真は、別の読みが必要なのではないか」という話し合いの深まりが自ずと生まれてくる。ここで筆者も「皆さんは、市中の救急車に乗っている本物の救急隊を見たことがありますか？」と発問し揺さぶりをかけ、批判的思考を誘発する。救急車のそばで、このような格好をしていれば、救急隊と判断するのも無理はない。しかし、根拠もなく決めつけていたり、思い込んだりしていないか揺さぶる。

当然そうに違いないと自分たちの回答に確信を持って満足してしまった雰囲気グループと、本当にそうかなと困惑している雰囲気グループがまじりあった中で、最後に発問3を出す。この発問をすると「えーっ！」という、驚いた、意外だ、

と言わんばかりの声が一斉に聴かれる。傷病者を救急車で搬送しようとしている家族と救急隊と読みとっていたグループは、発問があまりに意外過ぎたのか、笑い出してしまったりする。学習者は、ここで自ずと発問1からの思考過程をもう一度たどることになる。「よく見てよく考えなさい」と指示を出さなくても、学習者は先ほどよりもさらによく見てよく考えようとする。話し合いは騒々しいほどに活発になり、この写真がどのような状況の写真であるのか、読みが深まっていく。複数のグループを指定し、討議内容を発表してもらい、クラスで共有する。看護師のどのような活動であるのか、活発な議論が進み、発表の中には、「訓練」「訪問看護師」などの回答も出てくるようになる。

この写真は、数年前に実施された長崎県の災害医療訓練時に撮影した動画から切り取った静止画を加工し作成されたものである。災害医療訓練は、大災害が発生した際の、在宅療養者の避難救助に必要な医療に関する課題と対策を検討する目的で行われた。筆者もその訓練に参加した際に撮影した動画の一部だ。訪問看護師とDMATの隊員が同時に写りこむ瞬間を静止画にして、救急車は「病院」の表示がある救急車であるとわかるようにトリミングした。写真手前の二人のうち一人は、袖に刺繍が入ったポロシャツを着ている。よく見るとこの訪問看護師二人はとても似た格好をしている。写真奥の二人はヘルメットをかぶったDMATの隊員で、右側は医師、左側が看護師である。オンライン授業だと画像の質が上がり、救急車の中の看護師の右半身も鮮明に見える。DMATとは、医師、看護師などによって構成され大規模災害や事故などの現場におおむね48時間以内の急性期にかけつけ、現場で医療活動ができる機動性を持ち、専門的な訓練を受けた災害医療派遣チームのことをいう。学習者にはこの写真は災害予防・準備期の災害訓練であることを説明し、テキストに記載された災害サイクルを確認させる。そしてこれからの3年間で、准看護師課程では学習しなかった新学習内容として災害看護や訪問看護について学ぶことを説明し、これからの新学習内容へ

動機づけることが可能になる。

授業の最後に感想カードを書いてもらい、その内容を分析した。2018年の実践では以下のことが明らかになった。

<p><b>視野の広がり</b></p> <p>自分はパニックになりそうだが、実際の現場では冷静に適切な判断をしていなければならないため、広い視野を持ち、大勢の患者に対応しなければならない</p>	<p><b>必要性を知った</b></p> <p>災害時の医療の必要性や高齢者が多い日本では病院だけではなく、在宅にも医療的ケアの必要な人がいるので、災害医療の必要性を考えることが出来た</p>
<p><b>訓練の大切さ</b></p> <p>緻密な訓練があるからこそ、実際の現場でたくさんの命やひとりひとりの不安や恐怖を守ったりすることができることがわかりました</p>	<p><b>役に立つことができる 自分になりたい</b></p> <p>自分の知らないことが多く、知識をつけ、困っている人の役に立てるような人になりたい</p>

図1 授業の感想カード

感想カードを1文ずつコード化し、KJ法で分類、カテゴリー化した後に、その意味内容を学習目標に添って分析した結果から考察すると次のとおりである。

感想カードには、「看護師が活躍する場について視野が広がり、日本では病院だけではなく、在宅にも医療的ケアの必要な人がいるので、災害医療の必要性を考えることが出来た。」「緻密な訓練があるからこそ、実際の現場でたくさんの命が守られること」「将来様々な状況下で役に立つことができる自分になりたい」等と表現されていた。実際の感想は図1のとおりである。感想からは、興味を持って授業を受け、新学習内容の必要性を理解し、学習動機が高まっていることがわかる。

## II. 看図作文で疑似体験する—看図アプローチに慣れた学習者の体験—

### 対象等

<p>対 象：看護師 2年課程（昼間定時制） 3年生</p>
<p>科目と単元：科目「臨床看護の実際」 単元「これからの医療の課題」</p>
<p>実践時期：2021年度から実施（11月実施） 2021年度—対面</p>

## II-1 科目の概要

本科目は、45時間1単位の科目で、3年次4月に開講し12月に終わる。新人看護師の早期離職の要因となるリアリティショックは、看護基礎教育と卒業後に求められる臨床実践能力の差が大きいために10年前のカリキュラム改正で統合分野「看護の統合と実践」が新設された。この新設分野に属する科目である。

看護基礎教育の最終段階に開講する本科目は、既習内容をより臨床に近い形で統合するという目的を持つ。いわば看護基礎教育と臨床をつなぐ「架け橋」の役割を持つ科目である。専門分野の看護学で学んだ内容を土台にして、多忙な臨床において体験することになる多重課題への対応、優先順位の判断、緊急突発状況や割り込み状況への対応などの教育内容を盛り込んでいく。チーム医療が推進される中で、多職種と協働し看護師の役割が果たせるよう、様々な状況を設定しながら学習する内容もある。またこれからの医療課題を見据え、毎年新しいテーマによる学習を準備する。2021年度は「人生の最終段階における医療と看護」や「安全な医療の提供」「災害に対する準備」をテーマに、これまでの学習の統合を図ることを目標に授業を行った。

## II-2 単元目標

本単元は、これからの医療課題として、「医療安全」「災害対応」「医療と選択」の3つのキーワードで授業を展開する。本授業は「災害対応」のテーマを扱うこととする。災害看護や訪問看護の、これまでの講義や実習などの授業で得た経験を活用し、知識を統合させ、現実的な医療場面を創造することが目標である。

## II-3 授業の実際

本授業は、災害医療訓練時に撮影された動画から切り取った静止画1枚（1年次の看護学概論で使用した静止画と同じ写真1）と、訓練の際に許可を得て撮影された3枚の写真（写真2～4）を使った看図作文の授業である。3年間の学習成果を活用し、災害発生後の在宅療養者の避難を想定

した看護場面を創造させた。

授業計画では、災害への準備という授業テーマをアナウンスしておき、本時の前には、HUG（避難所運営ゲーム）で大地震発災時の避難所における課題解決を演習させた。災害発生条件は同じという設定で授業を開始した。

### II-3-1 災害発生時の在宅療養者

写真2が張り付けられたA4のワークシートを配付し、発問1,2について、それぞれ個人思考した後に、4～5名の小集団による集団思考を行った。



写真2

#### 発問1

救急車に乗って搬送される在宅療養者です。写真に写っているものを10個以上書いてください。

（個人思考3分 共有3分）

#### 発問2

この救急車に乗って搬送される、在宅療養者はどのような状態の人でしょうか。3側面から説明しましょう。

（個人思考5分 共有5分）

発問2は要素関連づけの発問である。3側面から療養者を説明するというのは、療養者の状態を身体的、心理的、社会的側面から説明するという

ことである。写真に写っているものを関連づけて、この在宅療養者を3つの側面から理解する。学習者の回答の一部を紹介する。一人の学習者の回答ごとに「」を付けた。

#### 学習者の回答例

「人工呼吸器を装着しており、自力体動が困難。排泄や移動動作の介助が必要。尿路の障害がある。意識状態は不明。」

「呼吸器疾患がある。」

「身体に麻痺がある。」

「身長は高い。」

「壮年期の男性。」

「一軒家に住んでいる。介助をしてくれる家族がいる。」

「訪問看護やヘルパーなど社会資源を利用して生活している。」

「荷物が片付いているので、世話をしてくれる家族がいる。」

「人の助けがないと避難できないことや突然の被災で不安がある。地震の際に上から何か落ちてこないか恐怖」

「家族への責任を感じている。」

「意思疎通に対する不安」

「仕事や家族のことを心配している。」

### II-3-2 在宅療養者の搬送

次に写真1が張り付けられたA4のワークシートを配付し、発問3,4について、それぞれ個人思考した後に、4～5名の小集団による集団思考を行った。



写真1（再掲）

発問 3

在宅療養者を搬送しようとしている写真です。写真に写っているものを10個以上書いてください。

(個人思考3分 共有3分)

発問 4

この場面はある問題が発生した場面です。どのような問題が発生しているのでしょうか。

(個人思考5分 共有5分)

写真1は、1年次に使用したものと同じものである。配付すると、「あー見たことある」という反応もみられた。今回は、問題—解決構造を持つ物語を考えてもらうことにしているため、要素関連づけで問題を読み取ることができるように発問した。学習者の回答を紹介する。一人の学習者の回答ごとに「 」を付けた。

学習者の回答例

- 「受入れ病院が見つからない。」
- 「病院に行くまでの道が遮断されていて、車で行けない。」
- 「病院に人工呼吸器が足りない。」
- 「家族と連絡が取れない。」
- 「情報が少ない。」
- 「(容体が)急変した。」
- 「人工呼吸器の電源バッテリーが切れそう。」
- 「土砂崩れや障害物で救急車が動けない(ルート確認をしている)」
- 「余震が続いている。」
- 「ベッドから転落した。」
- 「断水している。」
- 「地震の発生で家族の動揺が大きい。」
- 「救急車のガソリンが切れている。」
- 「家族が忘れ物をした。」

II-3-3 在宅療養者の到着



写真3

在宅療養者は、ようやくどこかに到着した。写真3には、二人の人物が写っている。発問6については「人物は指定しない。二人とも考えてもらってもいい。」と説明して、発問5と6を考えてもらう。

発問 5

在宅療養者を搬送している写真です。写真に写っているものを10個以上書いてください。

(個人思考3分 共有3分)

発問 6

ここに写っている人の思いを一言で表現してください。

(個人思考2分 共有3分)

発問6に対する学習者の回答の一部を紹介する。一人の学習者の回答ごとに「 」をつけた。

学習者の回答例 (療養者)

- 「生きているのかな。」
- 「どうなるだろう、不安だ。」
- 「寒いな。」
- 「長時間のベルト固定でストレスいっぱい。」
- 「怖い。早く家族に会いたい。」
- 「きつい。苦しい。助けて。今から何されるだ

ろう。」

「ようやく着いた。」

「家族が心配。」

「助けてください。」

学習者の回答例 (DMAT 隊)

「どうか助かってくれ。」

「やっと病院についた。」

「助ける。」

「もう大丈夫。」

「誰も来ないな。」

「病院は今どうなっているのだろうか。」

「早く医師のもとに送りたい。」

「がんばれ。」

「大丈夫かな。」

「遅くなってごめんね。」

「無事に受け入れてもらえてよかった。」

「次の緊急要請に向かおう。」

「最優先すべきは何だろうか。」

### II-3-4 畳の避難所



写真4 (一部モザイク処理)

写真4では畳上の布団に療養者が寝ており、その周りを様々な人物が囲んでいる。発問8では、この人物たちの会話を考えさせた。

#### 発問7

在宅療養者が到着した写真です。写真に写っているものを10個以上書いてください。

(個人思考3分 共有3分)

#### 発問8

この写真に写っている人たちはどのような会話をしているのでしょうか。

(個人思考5分 共有5分)

学習者の回答の一部を紹介する。一人の学習者の回答ごとに「 」を付けた。

学習者の回答例

「モニターどうかな？」

「呼吸状態は？」

「SpO<sub>2</sub>〈血中酸素飽和度のこと。血液中のヘモグロビンのうち、何%のヘモグロビンが酸素と結合しているかを示す〉あがりません」

「このまま呼吸状態が続けばひとまず大丈夫です」

「モニターに変化があればすぐに知らせてください」

「息子は大丈夫なんですか」

「がんばれ」

「呼吸状態はどうだ」

「やっと人工呼吸器がついた。もう少しで正常に動く。」

「大丈夫そうですね」

「バイタル安定してきました」

「酸素が安定してきた。よかった」

「電気も復旧してきた」

「レベルがさらに低下してきましたね」

「このままゆっくりみまもりましょう」

「おとうさーん。戻って来て」

「皆さん近くに寄って声をかけてください」

「大丈夫ですか」

「どうですか」

### II-3-5 在宅療養者が避難する物語をつくる

ここまで、4枚の写真コンテンツを、スピードをつけてテンポよく読み取ってきた。共有する時間も4人で5分ずつ程度なので、トントン進める感じだ。次々に考え続けるしかけだ。さて本時は、これまでの学習を統合する授業だ。4枚の写真の読み解きをもとに、これまでの在宅看護論や災害看護で学んだことを統合して在宅療養者が避難する物語を作るように次のように指示をした。

#### 指示

地震が発生して、在宅療養者を搬送する物語を書いてみましょう。600字ぐらいで。

学習者の作文を原文のまま2つ紹介する。

#### 看図作文例1

##### 物語の題名「在宅療養の家族」

「ご家族さん、酸素の量も上がってきたので一先ずは大丈夫ですよ。」避難所の一角で、人工呼吸器を使い半日ぶりにSpO<sub>2</sub>〈血中酸素飽和度のこと。血液中のヘモグロビンのうち、何%のヘモグロビンが酸素と結合しているかを示す〉が回復した父の姿を見て、安堵した。

私の父は仕事上の事故により人工呼吸器を着けての生活が必要となった。在宅での介護生活にも慣れ始めてきたころのことだった。明け方に起こった大地震により周辺の地区は停電。幸いなことに自宅や近辺の損壊は無かった。しかし、人工呼吸器を使っている父にとって電気を確保できないことは生命の危機に直結することであった。すぐに119番にかけたが電話は繋がらず、かかりつけの医師にも同様であった。父の反応はあまりなく、一刻も早く父の安全を確保しなければと思うが、時間ばかりが過ぎていき焦燥感に駆られる。非常用のバッテリーの残量も減り絶望しかけていたその時、外から救助の声が聞こえてきた。慌てて外へ飛び出し「助けてください！」と声を上げると、こちらに気付いた救助隊の人

が駆け寄ってきてくれた。父が人工呼吸器を利用していることを伝えると、「避難所の方に非常用電源があるのでそちらに行きましょう。」と、すぐに救急車で搬送されることとなった。救急車の中でも父の反応は薄く早く着いてくれと祈るばかりであった。避難所に到着し心電図モニターも付けられたが、脈はあるもののSpO<sub>2</sub>の値が上がらない。救命士や避難所の医師が対応してくれている中、「父さん。父さん。」と何度も声をかけると、ようやく反応を見ることができたのであった。

#### 看図作文例2

##### 物語の題名「もしものために…」

人工呼吸器を使用し、在宅で療養しているADL〈排泄や食事などの日常生活行動のこと〉全介助の松本さだおさん（仮称）は、自宅で妻のともこさんと娘のももこさんと共に暮らしている。3021年12月1日午後2時46分、地震が発生した。震度5強、マグニチュード8.0であった。2分間の強い縦揺れののち、揺れは収まったが、ライフラインは全て停止した。本棚やタンスが倒れ、窓は割れていた。地震発生時刻、主介護者であるともこさんは、ももこさんと共にリビングで昼食の片付けをしていた。揺れが収まり、互いの安否を確認したところ、2人とも怪我はなく無事であった。ともこさんは周囲の安全を確認した後、さだおさんの安否の確認のために、さだおさんの部屋へと向かった。ベッドで休んでいたさだおさんには幸い外傷などもなく、意識も保たれていた。しかし、停電により人工呼吸器は停止してしまっていた。ともこさんは非常時のために備えられていた酸素ボンベと予備電源を押し入れから取り出そうとするが、地震で押し入れの扉と支柱が歪んでおり、開かない。大声でももこさん呼び、2人がかりで押し入れの扉を開けようとするが、びくともしない。しかし、このまま人工呼吸器が止まった状態が長く続くと、さだおさんが酸欠に

なってしまうことは明白だった。ともこさんは、いざという時のために用意していたアンビューマスク〈患者の口と鼻からマスクを使って他動的に換気を行うための医療機器のこと〉が、ケア用品の荷物のなかにあることを思い出し、急いで取り出して人工換気を開始した。しかし、停電が回復する気配もなく、今後もしつ余震が来るかわからない。このままの状態を長くは維持できないと考えたともこさんは、訪問看護師の「非常時は救急車を呼んで、主治医の先生のもとに行ってください」という言葉を思い出し、ももこさんに電話をかけてもらおうとしたが繋がらない。ももこさんに、近くの公衆電話から緊急通報を頼み、その間人工換気〈自発呼吸が不十分な場合に行う手動的な換気補助のことを指していると思われる〉を続けた。自宅への道が倒壊しており、救急車到着までは15分ほどかかったが、無事に救急車が到着。すぐにさだおさんに搬送用人工呼吸器が取り付けられた。かかりつけの医院に向かおうとするが、道が倒壊しているため向かうことが出来ず、近くの福祉避難所〈高齢者、障がいのある人、乳幼児など特に配慮を要する人のための避難所のこと〉に搬送されることとなった。避難所に到着すると、そこには多くの人々が治療と安全求めて集まり始めていた。さだおさんは福祉避難所の前に設けられたトリアージエリアでトリアージ〈患者の重症度に基づいて、治療の優先度を決定して選別を行うこと〉を受けたのち、避難所の非常用電源による電気供給を受け一命を取り留めた。

（数年後）長く辛い避難生活が終了し、家族は訪問看護師と話し合いながら災害時の対応について見直しを行なった。ともこさんとともこさんは災害時には、予測できない出来事が多くあり、事前に十分に備えることの重要性について実体験を交えながらブログやSNSで発信をはじめた。

### Ⅲ. 考察と今後の課題

#### Ⅲ-1 より良い授業という視点から

看図アプローチや看図作文の授業をよりよくするためには、2つの要素が考えられる。1つ目は学習者の思考をつなげる仕組みや看図作文の共有を豊かにする仕組みという視点だ。今回の3年生の授業では、最後に予定していた作文の共有が十分にできなかった。学習者が作文に一生懸命に集中して取り組んでいたのに、時間で切って作文を読みあう指示を出し損ねてしまった。クラスで一人だけ代表で読んでもらったのだが、もっと回し読みをさせて共有したかった。授業終了時に作文の提出を促したが、まだ書き足りないから書かせてほしいという要求もあり、翌日までにTeamsを使って提出してよいことにした。筆者の観察では、20分の時間でほとんどの人が作文を書き終えているようだったが、授業終了後すぐに提出したのは一人だけで、あとは時間をかけて取り組んだ。今後はICTも活用して、よい共有の方略を考えたい。

2つ目は、目標と評価の一致という視点だ。評価の基準が明確になると教科での看図作文の汎用性が高くなる。評価の可能性について、今回紹介した作文を例に挙げながら少し考察してみる。看図作文例1の良さは、会話が最初に書かれていることだ。最後にした発問への回答を作文の最初に持ってくる技がキラリと光る作品だ。看図作文例2の良さは、外挿が、写真で示された時空を越えていることだ。発問は昼の避難所で終わっているのだが、この作文には被災者のその後の人生も描かれている。3021年の大地震という設定も興味深い。その頃のSNSはどのような手段なのだろうかとちょっと考えたりもした。

評価については森寛の看図作文の評価項目（鹿内信善編著2014,p.22）が参考になる。森は台詞と設定（ビジュアルテキストの前後）等を評価基準にしている。この基準を作文の筆者も自己評価に用いている。これは使える！作文技術の評価を可視化できる可能性がある。目標と方略そして評価が一致し、評価の妥当性が確認できれば、カリ

キュラムの中にさらに明確に位置づいていく可能性がある。

### Ⅲ-2 授業の観察と介入の必要性—目的からの考察—

対面授業であれば、写真を張り付けた A4 のワークシートを一枚配付し、看図アプローチによる協同学習をしていく。しかしオンライン授業の場合は、電子ファイルでワークシートを学習者個人に配付し、写真と同じスライドに発問を表示して個人思考させる。その後、ブレイクアウトルームで集団思考したのちに、メインルームでクラス内共有させる。対面授業は学習者たちの反応を如実につかむことができ、時間調整や発問のコントロールが可能である。しかしオンライン授業ではそれが難しい。ブレイクアウトルームを行き来しながら、話し合いに参加することで思考過程をつかもうと努力はするものの、断片的な把握になってしまうこともある。対面授業のように、全体的な学習者の反応や雰囲気を観察して把握することは難しく、介入するべき事態にも気づきにくい。

しかし、このように考える一方で、看図アプローチによる授業において、これらの観察や介入は本当に必要なのか、どの程度必要であるかについて疑問が生じる。看図アプローチの場合、よいコンテンツとよい発問が準備できれば、自ずと学習者は深い読みを始める。学習者だけで主体的な学習活動を始めていく。そうなる则ち教える側はタイムマネジメントやファシリテートが主な役割となる。「看図」を活用する授業は、答が正解かどうかには焦点を当て、正解探しの力を育てるわけではない場合が多い。意外な「答え」に意味を見出し、意外な「反応」に価値を見出しながら、新しいものへ出会う力を育てる授業である。鹿内は「協同学習をしていると『違った視点』にジャンプしていけるのです。学習者たちは、様々な視点にジャンプします。ジャンプして得られた多様な『考え』を結びつけていきます。そして、自分なりの新しい『認識』をつくり上げていくのです。これは『創造』と言ってもいい活動です。きちんとした根拠をもちながら、考えを飛躍させて『発見』にたど

り着いていくのです。(鹿内 2015,p.94)」と述べている。意外な答えや反応は、仲間と共にジャンプするチャンスに変わる。多様であるからこそ、違うからこそ、新しい発見がある。教える側がその場面に居合わせて、それらを否定することなく、それらの「なぜ」に焦点を合わせることによって、新しい発見への手助けが可能となる。看図アプローチによる授業で必要な観察は、学習者の多様な考え、学習者の価値ある発見に気づくために行われている。看図アプローチによる授業で行われる介入は、誤答を正答に導くために行われるのではなく、新しい認識をつくるための手助けのために行われるのである。このように考えると、オンラインか対面かその方法は異なっても、目的を踏まえタイミングを計って行えば、効果的に観察し介入できる可能性がある。

### Ⅲ-3 「看図」の楽しさ

本研究では、同じ写真コンテンツを使って1年生に看図アプローチで、3年生には看図作文で授業を実践した。1年生はまだ正解を探そうという意気込みが強く、様々なことを知らないでいて初々しい新参者であり、3年生にもなると正解探しにこだわらず、どのような場合も看護の対象の思いを押し量り、最善の答えを探しながら命を守る、医療者としての姿に変化していく。この変化過程を促進する触媒のような授業でありたいと筆者は常日頃考えている。

楽しいから看図アプローチで授業を考えるのだが、楽しいだけかというところではない。学習者と共に悩みぬいて授業にしていく過程は決して「楽」ではない。学習者が能動的に参加する授業は一朝一夕にはできない。教える側が日々、授業づくりに真剣に取り組み、学習者とその授業の価値に気づき能動的に行動し始めたときに可能になる。「授業が楽しい」ことは、教える側にも教えられる側にとっても大切だ。「授業が楽しい」の原点は、新しい、ものごとの発見であり、新しい自分との出会い、成長の自覚である。それが、「仲間と共に」であれば、発見、出会い、成長の機会が増えて、なお楽しいのだ。

## おわりに

看図アプローチは本校において、様々な形に変化しながら、その汎用性を高めている。これからも教員の独創性が発揮され、新しい看図アプローチの型が生まれてくるのだろう。看図作文は、学習者の論理的思考や再生的思考の力を強化し、創造的思考力の育成につながる可能性を持つものとしてカリキュラムの中での汎用性が高まっていく可能性がある。協同学習を基盤にした授業づくりに取り組んで、7年が経過しようとしている。この2年は、新興感染症への対応に追われた。今日も感染症の新しい株が、日本の各地で猛威を振るっているとニュースで言っている。令和5年度から本校はカリキュラムを改正する。競争よりも互恵の精神を醸成し、協同の精神と協働のかたちを基本に、創造的にカリキュラムを作っていく挑戦を続けていきたい。

## 引用・参考文献

- 鹿内信善編著 2014 『見ることを楽しみ書くことを喜ぶ 協同学習の新しいかたち ● 看図作文レパートリー ●』 ナカニシヤ出版
- 鹿内信善 2015 『改訂増補 協同学習ツールのつくり方いかし方ー看図アプローチで育てる学びの力ー』 ナカニシヤ出版

注 本研究の一部に科学研究費 19K10791 をあてた。

2022年2月2日受付  
2022年2月4日査読終了受理